

県北地域におけるネギコガを主体としたねぎ害虫の防除法

岩手県におけるネギコガの発生生態を明らかにし、薬剤の特性や他害虫による加害も加味して、県北地域における効率的なねぎ害虫の防除体系を構築した。

ネギコガ *Acrolepiopsis sapporensis*

幼虫の体長は約 9 mm。幼虫は葉の内側から食害する。ねぎで食害を受けると商品価値が著しく低下する。



写真1 ネギコガによる被害葉



写真2 ネギコガの蛹



写真3 ネギコガの幼虫

表1 ネギコガにおける卵巣発育状況の比較

雌成虫 日 齢	卵巣発育個体割合	
	夏季雌成虫	秋季雌成虫
0 日 齢	0.0%	0.0%
1 日 齢	62.5%	0.0%
2 日 齢	80.0%	0.0%
3 日 齢	80.0%	0.0%
4 日 齢	100.0%	0.0%

夏季と秋季における卵巣の発育状況が異なることから、ネギコガは成虫休眠を有すると考えられる。また、コナガと比較して耐寒性もあり、北日本で越冬していると考えられ、既知の発育零点及び有効積算温度から年間5世代前後発生すると思われる。

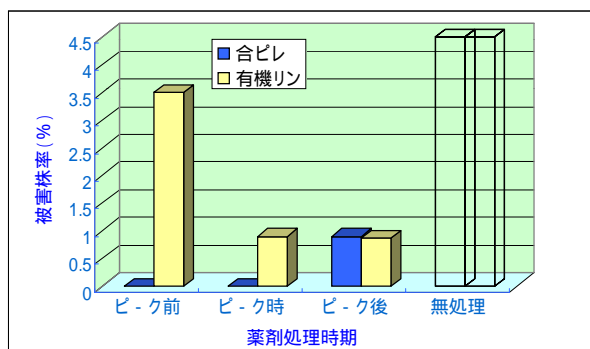


図1 薬剤の種類別の使用時期と効果

合成ピレスロイド剤を使用する場合は、トラップによる誘引消長のピ-ク前~ピ-ク時、有機リン剤の場合はピ-ク時~ピ-ク後の施用が最も効果的である。

発生量の少ないときは有機リン剤でよいが、多発生時及び収穫前の防除は、合成ピレスロイド剤が効果的である。

ネギコガは、北日本で越冬している可能性がある

飛来による加害はないと考えられるため各世代1回の防除で対応が可能

年4回前後の防除

他害虫との同時防除が可能